笑う賢治（3）一童話「革トランク」をめぐるって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 海上保安大学校 公開日: 2024-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏 メールアドレス: 所属: 海上保安大学校
URL	https://doi.org/10.15053/0002000034

【論文】

笑う賢治 (3) 一童話「革トランク」をめぐる

秦野 一宏

1.

賢治にデクノボーという理想像があったことは疑いない。ただ賢治にとってのデクノボーはある種、自身の欲を抑えることのできた例外的なく英雄>で、いかに人から蔑まれようとも、人々を包み込むようなそのやさしさには、どことなく聖者の匂いがする。「雨ニモマケズ」の一節、「ヒドリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキ」も、人々の苦に同期し、その苦を背負いたいという自身の叶わぬ願望を語ったものであった。「欲ハナク、決シテ／瞋ラズ／イツモシズカニワラツテキル」という現実離れしたデクノボーは、賢治にとってはどこまでも理想でしかなかった。

一方、「革トランク」の斉藤平太は<聖なる>デクノボーとは大違いだ。チェーホフの戯曲『桜の園』の幕切れ、新生活に向けて出立する一行がみな、病院へ行つたと勘違いし、結果、間拔けたことに鍵をかけられた家に一人取り残されることになった老僕フィールス。老齢と病でもう身動きもできない状態になった彼は、自身の長く生きた過去を振り返り、「この出来そこないめが」とつぶやく。自身を罵倒しているわけではないし、自分の人生に唾を吐きかけているわけでもない。その言葉には、自身が長く付き合い合ってきた弱く愚かな人間への一種のいとおしさが感じられる。チェーホフ世界にあっては、この「出来そこない недотёпа」は、非難の言葉ではないのだ。それは、人間というのは多かれ少なかれ、滑稽であることから逃れられない存在であることを認めたくえでの揶揄である。思うに、この「出来そこない」という言葉が、平太には似つかわしいのではないか。

2-笑う賢治 (3) 一童話「革トランク」をめぐる

デクノボーは人々からお節介だと疎まれることはあっても、ヘマをして笑われることはないが、「出来そこない」の斉藤平太はヘマばかりする。平太は建築士として廊下のない分教場や梯子のない二階建ての消防小屋を設計し、そのとんでもない設計図を工作室のまん中にかけておきながら、まるきりその不備に気づくことはなく、設計図通りに奇妙な建物を二つ同時に作りあげてしまった。自分のやらかしたことに気づくのは、仕事が完成した当日である。どうやら、イノセントな彼の頭はひとつ事に熱中すると、異世界が現出するらしい。「出来そこない」の平太はだれにあやまるわけでもなく、自分のしでかしてしまったことに「気を悪くして」、責任などはどこへやら、財布に三円あるのを確認すると、その時穿いていた乗馬ズボンのまま、そそくさと東京めざして逃げていく。

平太は学校の成績が芳しくなかったようだ。物語の冒頭の一節にはこう記されている。

齊藤平太は、その春、檜岡の町に出て、中学校と農学校、工学校の入学試験を受けました。三つとも駄目だと思ってみましたが、どうしたわけか、まぐれあたりのやうに工学校だけ及第しました。一年と二年とはどうやら無事で、算盤の下手な担任教師が齊藤平太の通信簿の点数の勘定を間違った為に首尾よく卒業いたしました。／（こんなことは実にまれです。）¹⁾

「実にまれ」な「こんなこと」とは、「齊藤平太」²⁾が偶然の僥倖で檜岡の工学校を卒業できたということを指すのだろう。成績が芳しくないというだけではない。性格的にも「実にまれ」なのではないか。平太の家は「農業」なので、農学校受験の選択は分かるし、わが道を行くという気概があれば、工学校、中学校という選択も理解できる。もちろん、複数受験して＜保険＞をかけておくこともあるだろう。しかし中学校に加え、まるで毛色の違う農学校と工学校の両方を受験するとなると、受験する者の性格のいい加減さ、ぐらつきが疑われやしないか。自分の将来に対する何の展望もなく、どこでも入りさえすれば、それでいいというわけなのだから。

さらに言えば、「実にまれ」な「こんなこと」とは、彼の生きる世界そのものが、奇妙に歪んでいるということを示している。算盤が下手で通信簿の点数の勘定を間違えようが、ある意味、入学試験を二つ失敗することよりも、ありえないほどの頓馬ではないか。平太もヘンだが平太の生きる世界そのものがヘンなのである。あるいは斉藤平太のこの伝記的な物語は、〈まれなこと〉ばかりが起こる奇妙なく異空間を舞台にしているのかもしれない。「こんなことは実にまれです」というまとめの言葉は、「こんなことは実に稀れです」、「こんなことは実に稀です」、「こんなことはごく稀れです」と、微妙に形を変えながら、東京での二年間の生活を経て、「ハハビヤウキ、スグカヘレ」という電報を受け取ったあと帰郷間際に革トランクを買うあたりまで、物語の中で、計九回も用いられているのだから。「まれ」なことばかりが起きる世界はもう、「まれ」が「まれ」でない世界にはかならない。

物語の中心には平太がいるわけだが、この主人公の背後には常に、村長である父親がいる。この父親は物語の前面には現れてはこないが、平太の人生においてはどうやら、村長である父親が強大な力をもっている。成績の芳しくない平太に三つの受験を後押ししたのも、父親だったのかもしれない。

卒業するとすぐ家へ戻されました。家は農業でお父さんは村長でしたが平太はお父さんの賛成によって、家の門の処に建築図案設計工事請負といふ看板をかけました。／すぐに二つの仕事が来ました。一つは村の消防小屋と相談所とを兼ねた二階建、も一つは村の分教場です。／（こんなことは実に稀れです。）

「こんなことは実に稀れ」という二度目のリフレインは、卒業後すぐに仕事が二つ舞い込んできた幸運を指す。ただこの幸運は、父親の七光りによるものであるので、そのことを含めて「実に稀れ」ということなのかもしれない。

平太は「お父さんの賛成」によって「建築図案設計工事請負といふ看板」

4- 笑う賢治 (3) — 童話「革トランク」をめぐる

を家の門に掛けるが、これは、平太が父を家長とする「イエ」に取り込まれていることを示している。また、家に戻りましたではなく、「家へ戻されました」と、強制力が働いたことを示す表現からも、家長としての父親の絶大な力が感じられる。平太が家に戻るとすぐに二つの設計仕事 came 来たわけだが、これもおそらくは父の力（後ろ盾）によるところが大きいのではないか。「村の消防小屋と相談所を兼ねた二階建」と「村の分教場」と、依頼された建物は「村」に必要なものである。おそらく村長ならば、村の公共施設の建設に絶大な力をもっている。仕事は明らかに村長である父親の口利きによるものだろう。とはいうものの、平太はそのことを気に病む様子もなく、四日かけて二つ図面を引き、その後も現場監督として張り切って取り組んでいる。

齊藤平太は茶いろの乗馬ズボンを穿き赤ネクタイを首に結んであっちへ行ったりこっちへ来たり忙しく両方を監督しました。／工作小屋のまん中にあの設計図が懸けてあります。／ところがどうもおかしいことはどう云ふわけか平太が行くとどの大工さんも変な顔をして下ばかり向いて働いてなるべく物を言はないやうにしたのです。／大工さんたちはみんな平太を好きでしたし賃銭だつてたくさん払ってみましたのにどうした訳かおかしい顔をするのです。／（こんなことは実に稀れです。）

「茶いろの乗馬ズボンを穿き赤ネクタイを首に結んで」などという細部の描写がなぜ必要だったのか。これはおそらく、ちょっとしゃれたなりをしてみたいという平太の意識—他人の目を意識しているのだ—を示しているのだろう。彼がエネルギーで、仕事に前向きであるのはいいのだが、同時にうわついてもいる。平太がひたすらこだわり続けているのは、二つの仕事と同じ日に完成すること、それだけである。そのためには用意周到に大工の「人数を巧く組み合せて」日程の調整までしている。奇妙なのは、そんなこまごまとした楽しい調整ができるのに、通路となる「廊下」と「梯子」を図面に書き忘れたまま、ずっと気づかずにいることだ。

図面をもとに働く「大工さん³⁾たち」はみな、建物の造りがどこかヘン

であることを暗に匂わしているのだが、初仕事に舞い上がったままの平太はまるでそのことに気づけない。「大工さんたち」としては、おかしいと、口に出して言えない。平太が生きる<世界>では、雇われの身で、妙なことを言ったら、仕事が回ってこなくなるかもしれないなどとまっとうに考える大工たちがいるとも思えない。平太の<世界>には算盤が下手で通信簿の点数の勘定を間違うような先生がいることを考えれば、それこそ、作曲家の林光が言うように、「ものすごく前衛的なゲンダイオンガクの譜を渡されてこれを弾けと言われた演奏家たちが、『本当にこれでいいのだろうか』と疑いながら、でも『もしかしたらいいのかもしれない』とって一所懸命弾いている」、そんな姿を大工たちに重ねて読んだほうがいいのかもしれない⁴⁾。いきさつはどうあれ、村の大工たちにとって平太は檜岡工学校を出たばかりの新進気鋭の設計士なのだ。妙に見えても、ここには自分たちには理解の及ばない<ゲンダイケンチク>の深い事情がある、と思ひ込む大工たちがいてもふしぎではない。「エスカレータ」や「エレベータ」などというものまであるらしい⁵⁾。科学技術は日進月歩で進んでいるのだから、最新の工法では自分たちの想像をはるかに超えたやりかたがあるかもしれない、などと思ひ込む大工たちがいてもふしぎではない。

この二つの建物をめぐっては対の描写、微妙な差異をもった繰り返しがじつにおもしろい。分教場の建築現場では—

大工さんたちはくるくる廻ったり立ったり屈んだりして働くのは大へん愉快さうでしたがどう云ふ訳か横に歩くのがいやさうでした。／(こんなことは実に稀です。)

消防小屋の建築現場では—

大工さんたちはくるくる廻ったり立ったり屈んだり横に歩いたりするのは大へん愉快さうでしたがどう云ふ訳か上下に交通するのがいやさうでした。／(こんなことは実に稀れです。)

6-笑う賢治 (3) 一童話「革トランク」をめぐる

どちらの現場でも、大工たちは「くるくる廻ったり立ったり屈んだり」しており、それが「大へん愉快さう」だと伝えられている。分教場の設計図には廊下を書き忘れられている。「どう云ふわけか横に歩くのがいやさう」だったのはもちろん、この設計図の不備と関係している。一方、消防小屋の設計図では梯子が作り忘れられている。「どう云ふわけか上下に交通するのがいやさう」だったのはもちろん、この設計図の不備と関係している。前者では「こんなこと」は「稀」と表記し、後者では「こんなこと」は「稀れ」と同じことを微妙な表記上の差異を浮きだたせる。「くるくる廻ったり立ったり屈んだり」する動作の連続は、まるで人形劇を見ているような楽しさをもたらす。「どう云ふわけか」と、そらとぼけてみせるところがまた、なんともいえずおもしろい。

わずかの差異をもつてのこの繰り返しからは、輪唱のような愉快的効果が醸成される。たしかに「こんなこと」は「稀 [稀れ]」なのだろうが、そこに同時完成という平太の遊び心が働いていることに注意したい。仕事着同様、彼は彼なりの奇妙なこだわりがあるのだ。

結局、平太は自身の失敗を身をもって知ることになる⁶⁾。自身の設計に基づいて建てた建物に通路と梯子を書き込むのを忘れていたことに気づいた平太は、ショックを表にだすことなく、所持金を確かめると、すぐさま東京へと遁走するのだが、そのことを伝える語りはなにかへんである。

そこで齊藤平太はすっかり気分を悪くしてそっと財布を開いて見ました。/そしたら三円入ってみましたのですぐその乗馬ズボンのまゝ渡しを越えて町へ行きました。/それから汽車に乗りました。/そして東京へ遁げました。

一見すると、文章を習い覚えただけの小学生が、宿題の作文で書きそうな稚拙な文章のように思える。家出という大仰な言葉もなく、家を出る決意表明もない。<そしたら～なので～した>という稚拙な複文を一つ挟み込み、あとはただもう、財布を開く、町へ行く、汽車に乗るなどの行動を順番に接続詞でつなげていだけ。衣服を着替える余裕もなく、作業着

である「乗馬ズボン」のまま村をあとにし、「渡しを越えて」町へ行き、汽車に乗って東京に向かう。追い立てられるように時はあっという間に過ぎ去ってしまい、故郷をあとにする感慨もない。「渡し」に関して説明している暇もない。読者に知らされるのは斉藤平太が「すっかり気分を悪くした」ことだけであるが、この舌足らずの文章の中に、我々は笑いながらではあるけれども、平太の味わったショックの大きさを想像する。

2.

平太はこうして村を出て、大都会で暮らしはじめるわけだが、その生活は彼にとって想像を絶した試練の連続であった。所持金をほとんど持たない平太にとって、東京はじつに冷たい街であった。

東京へ来たらお金が六錢残りました。斉藤平太はその六錢で二度ほど豆腐を食べました。／それから仕事をさがしました。けれども語がはつきりしないのでこの家でも工場でも頭ごなしに追ひました。

ここでも、短文をならべていく稚拙な文章によって、平太の行動だけを表面的に追っている。「～しました」の羅列だけ。さきほどは稚拙な文章の効用について触れたが、ここではさらに奇妙な、違和感のある表現の効用がクローズアップされる。ふつうに考えれば、＜東京へ着いたら、所持金の三円はたった六錢しか残っていませんでした。そのなけなしの金では、豆腐を二度食べるのがせいぜいでした。平太はどこへ行っても仕事はもらえず、言葉にもなまりがあったので、どなられ追い立てられました＞となるろう。おそらく、こういった＜ふつうの文章＞であれば、意味はすぐに理解できても、読者の心には残らない。そこで賢治は、読者に、平太の味わった辛さを強調することなくたんとと事実を列挙し、平太の味わったことを追体験させる道を選んだ。なにより、＜追われました＞ではなく、「追ひました」となっている点に注意したい。ここでは平太の心情は問題にされない。情けなくも「平太」は、受け身の構文の主語にもなりえないのだ。

「語がはつきりしない」のは訛りがあったからだろう。のちに出てくる

8-笑う賢治 (3) 一童話「革トランク」をめぐる

船頭や下男が使う言葉を上京当初、平太も使っていたのである。聞きなれない方言だともう、話に耳を傾けてもらえない。だから何度も何度も大きな声をあげて、口の中が「カサカサ」するまで、説明を繰り返さなければなかったのだ。

齊藤平太はすっかり困って口の中もカサカサしながら三日しごとをさがしました。／それでもどこでも断われたうたう檜岡工学校の卒業生の齊藤平太は卒倒しました。

下線部は、これまでならば、「齊藤平太は」ですむところ、今回はわざわざ「檜岡工学校の卒業生の齊藤平太は」などと、これまで以上に硬直した言葉を枕詞のように貼り付けてくる。たしかに平太も卒業生ではあるが、すでに触れたように、「首尾よく」そこを卒業できたのは、算盤の下手な担任が通信簿の勘定を間違ったおかげである。とはいえ、世間で大事なものはそんな＜裏事情＞はどうあれ、卒業したという事実なのだろう。加えて、故郷では檜岡工学校の卒業生というだけで、それなりの尊敬を受け、扱いも違っていただろうか。おそらくは地元の大工さんたちには通用した、檜岡工学校卒業という＜権威＞が東京ではまるで通用しない。そのことを一文はユーモアを交えて示しているのだろう。卒倒した平太は、巡査に水をかけられるが、語り手はそのことを巡査を主語にし、「巡査がそれに水をかけました」と表現する。さらに巡査が水をかけた「それ」はそのまま区役所に回される。

区役所がそれを引き取りました。それからご飯をやりました。するとすっかり元気になりました。そこで区役所では撒水夫に雇ひました。

平太は主体として扱ってもらえない。もはや人間ですらなく、「それ」と呼ばれるやっかいなモノでしかない。＜平太は区役所に引き取られ、ご飯をもらい、ようやく息を吹き返しました＞あたりが、ふつうに近い文章なのだろうが、それでは、役所が平太をどう扱ったかはまるで伝わらない。

「それからご飯をやりました。するとすっかり元気になりました」という文章からは、ガソリンを注入すると、車も動き出しました、と同じ調子のそっけなさを感じる。「そこで区役所では撒水夫に雇ひました」も、<お役所式の>情のない扱いを示す文章である。こまごまとした事情はすべて省略されてしまっている。区役所は出てくるが、区役所に勤めている人間には言及されない。人間だけではない、課にも係にも言及されない。すべて人間の顔のないのっぺらぼうの<区役所>が前面に出てくる。この<世界>では、区役所が杓子定規にそれにご飯をやり、区役所が杓子定規にそれを撒水夫に雇うのだ。

そういえば、平太を除けば、登場人物にも名前がない。示されるのは人間ではなく、檜岡工学校といった学校名や平沢組という社名だけ。大工たちの名も知らされない。

その後、斉藤平太は父に葉書を出すが、乾いた短文で行動を羅列しただけの文章で、「研究」などというこむずかしい言葉を混ぜ込みながら、煙に巻く。

エレベータとエスカレータの研究の為急に東京に参り候、御不便ながら研究すむうちあの請負の建物はそのまゝお使い願ひ候

丁重ではあるが、うわべを取り繕っただけのしゃちこぼった文章だ。何もかも放り出して逃げたことへの謝罪もない。あるのは「研究」と称しての自分が姿を消したことへの言訳だけだ。しかも、研究の成果が出るまでは、廊下のない分教場も梯子のない消防小屋も、不便であっても「そのまゝ」使ってほしいとは、いくらなんでも虫がよすぎる。「お父さんの村長さん」が「返事も出させ」なかった、その複雑な思いがわかるような気がする。

その後、夏は「脚気」、冬は「流行感冒」にかかって苦勞し、二年が過ぎる。その頃にはだんだん平太も東京になれてきて、ついには建築会社の平沢組に入り、「昔の専門の」建築の仕事に就くことになる。

とはいえ、東京の「大工たち」と和気あいあいと仕事ができただけではない。東京の「大工たち」と村の「大工さんたち」では、平太に対する態

度はまったく違った。ここでは、村長の息子であることも、檜岡工学校の卒業生であることも、何の意味もない。村では「大工さんたち」から好かれていたが（「大工さんたちはみんな平太を好きでした」）。東京では逆に憎まれ、いじめられている。

大工たちに憎まれて見廻り中に高い処から木片を投げつけられたり天井に上ってあるのを知らないふりして板を打ちつけられたりしましたがそれでも仲々愉快でした。

なぜ大工たちに憎まれるようになったのか、なぜいじめられたかも記されない。エネルギーに仕事をこなすかま猫（「猫の事務所」）のように、そのきまじめさが疎まれたのか、あるいは、ここでも不条理な設計図を書いてしまったのか、それとも自分たちとは違うよそ者や田舎者と見なされて、嫌がらせをされているのか、理由はなにもわからない。ただ、東京の大工たちに「憎まれて」も、どんなにひどい仕打ちを受けても、平太はそのことをつらいだの苦しいだのと、こぼすことはない。「それでも仲々愉快でした」。この一文のもつ意味は絶大である。

「外套」（ゴーゴリ作）のアカーキイ・アカーキエヴィチは、同僚たちにどんなにからかわれても、浄書の仕事に差しさわりのない限りずっと我慢していたが、仕事をさせまいと肘をつつかれるようになると、さすがに「放っておいてください。なんだって人をばかにするんです？」と抗議した。平太の仕事への情熱はどうやらアカーキイ・アカーキエヴィチ以上であったらしい。あるいは仕事のおもしろさがいじめられる辛さを無化するような、鞏固な内的世界を持っているのか。

関口安義はこの「それでも仲々愉快でした」という一文を取り上げ、「彼は、もはや昔の平太ではない」⁷⁾と断じ、さらにこう指摘する。「ここには信念を持った愚直な男、—『神聖な愚人』の面影を漂わせた人物がいるのだ」⁸⁾。わたしには、この「それでも仲々愉快でした」は「信念」とは別物のように思える。それさえあればなにもいらぬという、アカーキイ・アカーキエヴィチの浄書のように、平太の建築設計の仕事は、まさに生その

ものになってしまっていたのだ。

また、この一文―「それでも仲々愉快でした」―は、平太が、天沢退二郎の言うような「単純で平凡な、悲しい男」ではないことを示している⁹⁾。

「それでも」という接続詞と「仲々」という副詞が、平太の柔軟な精神構造をよく物語っている。三日間、食事もとらず、仕事探しをしつづけていれば、さすがに「卒倒する」が、それでも、「ご飯」をもらおうと、平太は起き上がりこぼしのように立ち直ってくる。そして二年の歳月が過ぎ、東京の事にもなれてくると、ついには「専門の建築の方の仕事」に入る。その間の苦労は「夏は脚気にかゝり冬は流行感冒です」という、じつにあっさりとした記述でおしまい。自身のつらいことや苦しいことに対してあまりに鈍感すぎて、これでは人の苦しみを押し量れまい。「わが胸のいたつきこれなべての人また生けるものの苦に透入するの門なり」と「雨ニモマケズ手帳」に賢治は書き記しているけれども、こんな思いは平太には無縁である。平太は「神聖な愚人」でもなければ、「悲しい男」でもない。彼はただ「出来そこない」であるがゆえに、愉しく、前向きで生きていけるのだ。

たとえ理不尽な仕打ちを受けたとしても、平太にはそれに報復するような猛々しさはない。それどころか、自分を邪険に扱い、いじめる者たちに対しても敵意すら持てない。この「出来そこない」には、自分なりにではあるとはいえ、人を包み込むやさしさがある。このようなイノセントな人物像は、毒もみが違法であると知りつつ、それをしないではいられない「署長さん」（「毒もみのすきな署長さん」）を思い起こさせる。このプハラ¹⁰⁾の国の警察署長は騾馬や赤ん坊にまで心を砕くやさしい、穏やかな人であったが、毒もみへの誘惑にだけは勝てなかった。結局、毒もみが好きすぎて、取り締まりの組織の長でありながら、「林野取締法第一条」の法律を犯し続けてしまう。結局、そのために捕まり死刑になるのだが、「いよいよ巨きな曲った刀で、首を落されるとき」にも、「あゝ面白かった。おれはもう毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな」と「笑って云」った。署長や平太の生きる<異世界>は、何が起ころうと生きることは楽しいと感じさせる一種さわやかな笑いに満ち溢れている。

3.

東京にいる間、平太は二度、父親に葉書を書いているが、自分の悲惨な生活に触れることはない。それどころか、家の者を安心させるためか、見栄を張って東京での生活をよく見せようとさえする。しかし、家からの反応はない。「お父さんの村長さんは返事も出させませんでした」。母親は息子のことが心配でたまらなくとも、父親は返事を出させない。父親が飾りたてた平太の言葉を信じていないことは歴然としている。

すでに引用した初回の葉書では、田舎暮らしでは縁のなさそうな「エレベータ」や「エスカレータ」という外国語のモダンな言葉の響きが効果的に使われていた。平太は後付けの辻褄あわせで、「エレベータとエスカレータの研究」のために「急に」上京したと説明しているが、東京への出奔はもちろん、そんな殊勝な理由では毛頭ない。平太が自身の設計ミスをどう感じたのか、そこのところはよくわからない。おそらくどんな苦悩も持続することがないのだろう、彼の心中を明らかにする表現はほとんどないのだ。「ひどくがっかりして」と「すっかり気分を悪くして」—このおおまかすぎる説明が、東京へ遁走する理由のすべてになる。

さて、平太が二年後に父に宛てて書いた、もう一通の葉書にはこう書かれていた。

近頃立身致し候。紙幣は障子を張る程有之諸君も尊敬仕候。研究も今一足故暫時不便を御辛抱願候。

「昔の専門」を生かして平沢組の監督になることができ、金銭面でも多少の余裕が生まれてきたのだろうが、そのことを素直には書こうとしない。相変わらず、候、候と、形だけは厳めしいが、中身の無い、まったくもって嘘くさい文面だ。ここでの一番の可笑しみは、「立身致し候」などと、口語文で使えば顔が赤らむような言葉を、堅苦しい候文を隠れ蓑にして嵌め込んでいるところにある。被威圧感に気おされながらも、父親が自分にかかる期待や心配がどんなものであるかを考え、平太は平太なりに事を荒立

てないようにしているのだろう。

だまそうという意図はないのだが、体裁は保ちたいのだ。とはいえ、いくら金回りがよくなり、仕事もそれなりに充実しているとはいえ、よりにもよって「紙幣は障子を張る程」あり、「諸君も尊敬仕候」とは、なんというばかばかしい<体裁>だろうか。大工たちに憎まれて、こんな仕打ちを受けていますとはもちろん書けないにせよ、せめて、仕事仲間ともうまくやっていますぐらいのところで留め置けばいいのに、「尊敬仕候」では余計に胡散臭くなってしまふ。父親はおよそのところを見通したうえで、母親の心配をよそに、今回も「返事も何もさせ」なかった。

ところが突如、もはや言い繕うことのできない緊急事態に陥る。「ハハビヤウキ、スグカヘレ」という父からの電報一本で、平太は村に帰らざるを得なくなる。飾りのない片仮名短文の電報の文体が、優雅な候文をねじ伏せたのだ。こうなると、もうこれまでのように、畏まった言葉で虚構を作り上げることができなくなってしまう。迫る父親との対面をなんとか乗り切るために知恵を絞って、対策を講じなければならない。こうして「大きな大きな」革トランクという、触知できる現実のモノが登場することになる。

平太はいろいろ考へた〔末〕二十円の大きな大きな革のトランクを買ひました。けれどももちろん平太には一張羅の着てゐる麻服があるばかり他にに入れるやうなものは何もありませんでしたから親方に頼んで板の上に引いた要らない絵図を三十枚ばかり貰ってぎっしりそれに詰めました。／（こんなことはごく稀れです。）

もうないだろうと思っていた愉快なリフレーション「こんなことはごく稀れです」が、読者の不意を衝くように挟みこまれる。一体、何が「稀れ」だと言うのか。帰郷に際し、持って帰るための入れ物を買ったのはいいが、入れる中身がない。「いろいろ考へた末」というが、いったい何を考へて「二十円」というとてつもなく高価な革のトランクを買ったのか¹⁰⁾。おそらく、持参される高価で大きな皮トランクは、「近頃立身致し候」といったこれま

での言葉を裏付けるものとしてうってつけだったのである。平太は、高価で大きな革トランクには、さぞや大事なものが詰まっていると思われると踏んだのだ。彼は父親の想像力に賭けたのである。実際には中に入れるものは何もないので、親方に頼んで板の上に引いたいらぬ絵図三十枚をもらい、それを詰めて持ち帰ることにした¹¹⁾。いやはや、こんな阿呆なことはたしかに「ごく稀れ」にしか思いつかない。読者の頭の中にはまだ、奇態な廊下のない分教場、梯子のない消防小屋の残像が残っているが、その記憶が今回の「ごく稀れな」事態をよりいっそう、爆発的に滑稽にする¹²⁾。

村が間近の帰路、「故郷の停車場」に着いたあたりから、文調が少し変わってくる。

それからトランクと一緒に俥に乗って町を通り国道の松並木まで来ましたが平太の村へ行くみちはそこから岐れて急にでこぼこになるのを見て俥夫はあとは行けないと断って賃銭をとって帰って行ってしまひました。

「トランクと一緒に」と、トランクがまるで伴侶のように扱われているのがおもしろい。行きは金もなく、人力車などには乗れなかった。着ていた衣服も違う。今は「一張羅」の麻服を身につけているが、行きは仕事着の乗馬ズボンといういで立ちだった。なにより大きな革トランクは行きにはなかった。おそらく平太は、故郷に錦を飾るといふような場面を演出しなかったのだろう。

行きと帰りでは時のたち方も違う。心中の表現は行きと同じく、ないけれども、道中の動きがていねいに、細かく説明してある。

齊藤平太はそこで仕方なく自分でその大トランクを担いで歩きました。ひのきの垣根の横を行き麻ばたけの間を通り桑の畑のへりを通りそして船場までやって来ました。／渡し場は針金の綱を張ってあつて滑車の仕掛けで舟が半分以上ひとりで動くやうになってゐました。

「渡し」から町までの道のりもきちんと説明されている。行きは「渡しを越えて町へ行きました」と、時間はあわただしく過ぎていくが、帰りの時間は心に余裕があるのか、景色を眺めながらゆっくりと進む。行きと帰りの心の中を反映するような、この緩急の差がおもしろい。

もう夕方でしたが雲が縞をつくってしづかに東の方へ流れ、白と黒とのぶちになったせきれいが水銀のやうな水とすれすれに飛びました。そのはりがねの綱は大きく水に垂れ舟はいま六七人の村人を乗せてやっと向ふへ着く処でした。向ふの岸には月見草も咲いてゐました。舟が又こっちへ戻るまで齊藤平太は大トランクを草におろし自分もどっかり腰かけて汗をふきました。白の麻服のせなかも汗でぐちゃぐちゃ、草にはけむりのやうな穂が出てゐました。

もう語り手のとぼけ顔はなく、故意に稚拙にみせかける<滑稽の技法>も消えてしまった。文章に叙情性が加味され、はじめて絵に描かれるようなのんびりとした自然の描写が入ってくる。雲が縞を作ってしづかに東へ流れる、白と黒のぶちになったせきれいが「水銀のやうな」水とすれすれに飛ぶ、向こう岸には「月見草」が咲いていて、草には「けむりのやうな穂」が出ていた……。このように語り手の言葉は、平太の心情に沿ってポエティカルになるが、ただしゃちこぼった「齊藤平太」もいつものように割り込んで来るし、「どっかり」腰掛ける、「白の麻服のせなかも汗でぐちゃぐちゃ」というように、身体性を露骨に示す口語脈も消えてしまわないところから、平太が無意識のうちに、東京で立身出世して故郷に錦を飾る成功者の役を演じていることが察せられる。

噂をききつけたのか、子どもたちがあちこちから七、八人集まってくる。子どもたちには平太の大きなトランクが珍しかったのだが、彼らはだんだん近づいてきて、トランクを観察し、それが革で出来ていることを発見する。

「おお、みんな革だんぞ。」／「牛の革だんぞ。」／「あそごの曲った処

「あ牛の膝かぶの皮だな。」／なるほど平太の大トランクの締金の処には少しまがった膝の形の革きれもついてみました。平太は子供らの云ふのを聞いて何とも云へず悲しい寂しい気がしてあぶなく泣かうとしました。

子どもたちが話しているのを聞いた平太は、なぜ「悲しい寂しい」思いが込みあげてきて、泣きかけたのだろう。関口は、この個所について、「平太は子どもたちが話題にするのが、牛の革で出来たトランクの外観であり、『要らない絵図』の入った中身を知ったら何と言うか、『悲しい寂しい気』がしたのである」と述べている¹³⁾。もしもそうであるなら、平太は、入れるもののないトランク購入という自分の行動の虚しさを痛感していることになり、童話「革トランク」の笑いの意味はまったく異なるものになる。ここはおそらく、久しぶりに故郷のなまり言葉を耳にし、帰郷したことに実感して胸が込みあげてきたと解したほうがいい。「何とも云へず悲しい寂しい」気がしたとあるからには、はじめての東京で仕事を探していた時のことが頭をよぎり、「語がはつきりしないので」どこの家でも工場でもむげに追い払われことを思い出したのかもしれない。

舟がだんだん近よりました。／船頭が平太のうしろの入日の雲の白びかりを手でさけるやうにしながらじっと平太を見てみましたがだんだん近くになっていよいよその白い洋服を着た紳士が平太だとわかると高く叫びました。／「おゝ平太さん。待ちでだあんす。」／平太はあぶなく泣かうとしました。そしてトランクを運んで舟にのりました。舟はたちまち岸をはなれ岸の子供らはまだトランクのことばかり云ひ船頭もしきりにそのトランクを見ながら船を滑らせました。波がびたびた云ひ針金の綱はしんしんと鳴りました。それから西の雲の向ふに日が落ちたらしく波が俄かに暗くなりました。向ふの岸に二人の人が待ってみました。

船頭とは旧知の間柄で、二年越しの再会が平太の気分を高揚させたのだろうが、涙を誘うのは、ここでもやはり「待ちでだあんす」というお国言葉があればこそだろう。船頭は「しきりにそのトランクを見ながら」船を滑

らせたというが、何を考えて見ていたのかは記されていない。平太の考えではこの革トランクは、「近頃立身致し候。紙幣は障子を張る程有之諸君も尊敬仕候。研究も今一足故暫時不便を御辛抱願候。」というしかつめらしい文面と同じ効果をもつはずであったが、船頭にそのようなトランクの複雑な記号性が理解できたとは思えない。ただ、「しきりに」見ていたことから考えて、それが船頭にとって<興味をそそられる珍しいもの>であったことだけは間違いない。

船から降りた平太を出迎えたのは下男であった。この下男の反応は、子どもたちや船頭とはかなり違っている。「お待ち申して居りあした。お荷物は。」と語りかけてくる下男に対して、平太は「だまって眼をパチパチさせながら」トランクを渡す。すると下男は「まるでひどく気が立って」、その大きな革トランクを背負う。ものも言わず「眼をパチパチさせる」のは、ここでも訛り言葉が影響しているのだろう。ただ、その「パチパチ」を下男がどう受け取ったかはさだかではない。大切に扱ってくれというメッセージと受け取った可能性も多分にある。下男が「ひどく気が立」つのは、メッセージを受け取ったかどうかは別にして、とにかくトランクを大切に扱わなければならないと念じる緊張感を示している。この下男のトランクの扱いをめぐる緊張は、かねてから平太が期待していた通りの反応だったにちがいない。ところが、この革トランクは、肝心かなめの村長の父にはまるきり効を奏さなかったのだ。

効を奏さなかったところではない。革トランクは父親にまったく違う印象を与えてしまうことになる。それはなにより、平太と父の再会の状況が大きく作用する。二人は顔を突き合わせて、再会の挨拶をしたわけではない。関口安義は「父の村長さんから『にが笑ひ』をもって迎えられるところで終わる」と記している¹⁴⁾が、厳密には平太は父に迎えられるてはいない。このことが重要なのだ。

それから二人〔平太と下男〕はうちの方へ蚊のくくん鳴く桑畑の中を歩きました。／二人が大きな路に出て少し行ったとき 村長さんも丁度役場から帰った処でうしろの方から来ましたがその大トランクを見て

にが笑ひをしました。

出迎えるなら顔と顔を突き合わせるはずであるが、役場での勤めを終え、帰途に就く「村長さん」はうしろの方から来る。彼は息子に声をかける前に、背後から下男のかついでいる「大トランク」を見て、「にが笑ひ」した。

父親の革トランクへの反応は、子どもたちや船頭、下男のものとはまったく違う。革トランクが高価であることは、下男と同じく父親にも伝わったにちがいない。ただ、平太が心中、期待していた反応は得られない。息子もずいぶん立派になった、こんな革トランクまで買えるほどりっぱになった、という思いからこぼれる安堵の笑い、—それを平太は待ち望んでいたのだが。

なぜそんな大きな革トランクを持って帰ったかという理由を、「父の村長さん」は背後から一瞬にして見透かしてしまった。トランクに込められた複雑な記号性を一瞬で理解した父親は、感心するのではなく、笑った。嘲笑したわけではない。その笑いは「にが笑ひ」であった。中身がないのに一所懸命に大きく見せよう、取り繕おうとしている軽薄な息子の馬鹿さ加減と、なんとか、だましてでも親を喜ばせたいという息子の無邪気な願い、その両方を感じたからこそその「にが笑ひ」だった。

こうして、積み重ねられた笑いによって<寸法>の変わった異世界において、平太の革トランクは、アカーキイ・アカーキエヴィチの外套のようなシンボリックなモノになる¹⁵⁾。それは、子を思う父の後方からの視線の中で、最終的に、実際よりもちょっと大きく、ちょっと立派に見せたいという人間の、逃れられない—それなくしては生きていけない—愉快なさがの象徴となる¹⁶⁾。

問題は「にが笑ひ」は、父親だけのものなのかという点にある。往々にして後ろ姿にはすきがある。一見すきのなさそうな父親でも、その後ろ姿にはすきがある。父親が、前を歩く平太と彼の大きな革トランクをしょった下男の後ろ姿を見て「にが笑ひ」を浮かべたこのシーンは、じつは後ろ姿ばかりを描いた静止画になっている。構図としては、中央に、しょわれた大きな革のトランクがあり、絵を見ている我々の視点は、父親を含め、

三人の後ろ姿を見る位置にある。つまり、「にが笑ひ」をしている父親自身も笑いから逃れられないということだ。父親の村長さんも、平太が「檜岡工学校」を卒業した時は彼のことを自慢げに思っていたことを思い起こそう。卒業後すぐに家に呼び寄せ、「家の門の処に建築図案設計工事請負といふ看板」を掲げさせたのもこの父の村長さんであった。いかに軽薄であろうとも、平太は彼の自慢の息子であった。言い換えれば、平太自身が父親の「革トランク」、みかけはいいが、中身は空っぽの革トランクであったのだ。

こうして、平太の軽薄さを笑う父親も、我々読者の「にが笑い」の対象になってしまう。ただ、今笑っている読者だって、その背後に視線がないとはかぎらない。「にが笑ひ」は連鎖する。

注

- 1) 強調は筆者のもの。以下同じ。
- 2) ここで「斉藤平太」に傍点を振っているのは、一種のしゃちこぼりを示す滑稽の技法であることを表す（以下同じ）。「革トランク」では、「斉藤平太は茶いろの乗馬ズボンを穿き…」「斉藤平太は分教場の玄関から…」「斉藤平太はその六銭で…」など、全集でわずか六ページの物語の中で、容儀を正すようなフルネームの「斉藤平太」はなんと十四回も繰り返されている。同種の例はゴーゴリの「外套」にもある。ここでは「作者」がアカーキイ・アカーキエヴィチを「バシマチキン」という姓で呼ばず、しゃちこぼった「アカーキイ（名）・アカーキエヴィチ（父称）」という呼称表現を執拗に用いている（冒頭から新調された外套ができあがるあたりまでの前半部分だけで、およそ四十回ほどの「アカーキイ・アカーキエヴィチ」が使われている）。
- 3) 村の大工に対して語り手はつねに、敬称を付して「大工さん」と呼んでいるが、東京の大工に触れる時は、後述するように、敬称抜きで「大工」と呼ぶ。この区分は、村と東京という二つの世界の質の違いを醸成する役割をもっているのだろう。
- 4) 林光・山口昌男「宮沢賢治と音楽」『新文芸読本 宮沢賢治』河出書房新社、1990年、158頁（初出は「國文学」1989年12月号、學燈社）。
- 5) 千九百年（明治三十三年）のパリの万国博覧会では、エッフェル塔にエスカレーターが設置されて話題となっている。須田浅一郎の調査によると、日本ではエレベーターは明治二十三年、浅草の松屋凌雲閣に、エスカレーターは大正十二年、銀座松屋に設置された（「エスカレーター」— 続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成』第15巻、1992年、278頁。一初出は『四次元』第12巻第10号、1960年）。
- 6) この場面の語り方にも、輪唱効果が見られる。その語りの骨格はく^レ斉藤平太は〜しようとしたが、どうしてもできませんでした。それは〜がなかったからです。（こんなことは実に稀です。）>となる。
- 7) 関口安義『続 賢治童話を読む』港の人、2015年、95頁。

- 8) 同上。「神聖な愚人」とは、芥川龍之介の小説「じゅりあの・吉助」(大正8年)の中の言葉。関口は芥川の吉助と、賢治の虔十、デクノボー、さらには平太を「神聖な愚人」として一括りにしてしまうが、たとえばデクノボーと同列に扱えるような「神聖さ」など、平太にあるのだろうか。
- 9) 天沢退二郎「「革トランク」解説」、ちくま文庫版『宮沢賢治全集6』、1986年、525頁。
- 10) 大正十年一月三十日付の関徳弥書簡によれば、賢治が東京で、「朝八時から五時迄座り切りの労働【筆耕の仕事】」で得た給料は、月十二円であった。このことから、平太が買った二十円の革トランクがいかにか高価なものがわかる。
- 11) 周知の通り、賢治は大正十年一月、突然、家出上京し、妹の病気の報せに接し九月頃に帰郷した。「革トランク」は、この折の自身の体験を下敷きにして書かれているところから、続橋達雄は、この童話は「大正十年、家出上京の心情をこの童話は「大正十年、家出上京の心情をユーモラスに描いたもの」で、「自らの夢と現実とのずれを、めぐり出している」と指摘している(『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社、1969年、138頁)。現実においては、賢治が持ち帰ったトランクは革製ではなく、「茶色のズックを張った巨きな」もので、そこには、童話原稿がぎっしり詰まっていた(宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房、1991年)。言い換えれば、七ヶ月の間に書き溜めたたくさんの原稿を詰め込むために「巨きなトランク」が必要であったのだ。この必要性の有無が、現実と虚構の決定的な差になる。
- 12) 森荘巳池は、賢治についてのこんな思い出を書き記している。—「曾我廼家の系統の田舎回り劇団の喜劇をいっしょに見せられた時のこと。森は「純粋な文学」、「純粋な劇」こそ至純至高なものであると考えていたが、賢治は違った。賢治は笑いを全く別な風に理解していた。「こっけい」というものの「原型」的な演出、それを三回、四回と重ねてゆくことで、ついに笑いを爆発させる、そういう喜劇の手法について、賢治は語った」(森荘巳池『宮沢賢治の肖像』津軽書房、1974年、14頁)。
- 13) 前出『続 賢治童話を読む』、99頁。
- 14) 同上、100頁。
- 15) モノをシンボルの高みにまで引き上げた作品としては、日本では芥川龍之介の「芋粥」(大正五年)や宇野浩二の「蔵の中」(大正八年)があるが、「革トランク」執筆(大正十二年頃)前に、これらを宮沢賢治は読んでいたのかもしれない。ちなみに、芥川と宇野の両作品は明らかにゴーゴリの「外套」の影響のもとに書かれている。このあたりの詳細については、以下の拙稿を参照されたい。秦野一宏「ゴーゴリと日本文学」、原暉之・外川継男編『講座スラブの世界8 スラブと日本』弘文堂、1995年、所収、225-230頁。ちなみに「外套」には、大正十二年までに絞って言えば、明治四十二年の西本翠蔭訳「外套」^{マントル}ほかに三つの翻訳がある。
- 16) 弟の宮沢清六が伝える「兄のトランク」は、「うすぐらい」土蔵の二階に投げられていたり、また原稿が入れられたり、「石灰岩の製品」が詰め込まれたり、トランクの蓋の袋から「手帳」(「雨ニモマケズ手帳」)が見つかったりと、兄賢治の人生を点綴するよすがになるが、童話の「トランク」のような象徴にはなっていない。

*賢治作品・書簡からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』に拠る(ただし、ルビに関してはこの限りではない)。